

15 茶杓 銘「岩戸」共筒

益田非默（1852-1903）作
竹製 長18.5cm
明治時代 19-20世紀

16 黒楽茶碗 銘「次郎坊」

長次郎（生没年不詳-1589頃）作
陶器 高8.4cm
桃山時代 16世紀

「国宝にもなるべき古鏡」**17 線刻十一面観音鏡像【重要文化財】**

青銅製 径31.6cm
平安時代・長承3年（1134）

鏡面に神仏の姿を線刻したものを鏡像といいます。端正な姿の十一面観音坐像を蹴り彫り（楔形を点線状に連ねて線を描く技法）で表現された本作は、鏡像が流行した平安後期の優品です。裏面には、長承3（1134）年に僧定俊が奈良・東大寺の二月堂に施入した旨の銘文が線刻されています。二月堂は、十一面観音に罪を懲悔する儀礼「お水取り」の舞台としても知られます。

松永は昭和31（1956）年10月7日の茶事において、濃茶を振る舞った後に「国宝にもなるべき古鏡」と言って本鏡を箱から出して披露したそうです（『雲中庵茶会記』下巻p.593）。松永の蒐集は、ちょうどこの年から飛躍的に増加し、対象も茶道具の範疇を超えた幅広い美術品へと広がりました。それは自身のコレクションを展観する美術館の設立（1959年11月に開館する「松永記念館」）を目指したもので、本鏡の購入もその一環と思われます。本鏡は平成12年（2000）、国の重要文化財に指定されました。

米寿の記念に**18 大燈国師墨蹟（淨慈建後の文）【重要美術品】**

宗峯妙超（1282-1337）筆
紙本墨書・掛幅装 32.3×43.2cm
南北朝時代・建武元年（1334）

大燈国師（宗峯妙超）は京都・大徳寺の開山。その筆跡は気迫にあふれ、わが国の墨蹟の中でも特に尊重されてきました。本作は大燈53歳の筆で、年貢米に関する指示を書いたもの。冒頭の「うらかみ」とは、大燈の出身地である播磨国浦上庄のこと。その土地の年貢米を「めうかくじ（妙覺寺）」（京都の「北大路大宮」に所在した尼寺で、元徳2年（1330）に大徳寺に寄進された）の寺料にあて、住職にはそのうち三石をあてるようという指示内容が書かれています。こうした内容から本作は、古くから「淨慈建後の文」または「よね（米）の文」と通称されていました。

松永がこれを入手したのは昭和37年（1962）、数え88歳の時。そう、自らの米寿の記念として「よね（米）の文」と称される本作を入手したと言われています。晩年期の松永の茶については記録が少なく、本作がどのような取り合わせで用いられたかは不明です。

晚冬から初夏まで、定番の香合**19 流水梅柳文蒔絵螺鈿鏡箱**

木胎漆塗 径12.0cm
鎌倉時代 13世紀

鏡を入れるための箱で、金粉をふんだんに振りちらした蒔絵と細緻な螺鈿（青貝からとった真珠色の材料による装飾技法）によって水流や木々が実に華やかに表現されています。蓋表には、梅と柳の枝の中に「春（はる）堂（た）川（つ）／東（と）伊（い）」と読める五文字が巧妙に隠されています。平安時代の歌人・壬生忠岑の「春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みてけさは見ゆらむ」（『拾遺和歌集』1所収）のような、立春の歌に取材したのでしょうか。梅を晚冬、柳は初夏とすれば、その間にるべき春の象徴としての桜が不在であることに気づきます。それを立春の和歌をモチーフとした文字を隠すことで、奥ゆかしく表現したかもしれません。

松永が本作を入手した時期は不明ですが、香合として、新春から初夏までよく用いたことが、老樺荘時代の茶事の記録から判明しています。

ろう きよ そう まつ なが じ あん 老樺荘の松永耳庵

会期 2022年11月15日|火|-2023年1月22日|日|

会場 松永記念館室



老樺荘（写真提供：小田原市郷土文化館）

松永耳庵（1875-1971、本名は安左工門）は、戦前・戦後の電力業界で多大な功績を残し、また屈指の数寄者茶人として名を馳せた人物です。福岡での鉄道事業を足掛かりとして電力業界で躍進し、「電力王」と謳われる実業家となりますが、戦時下における電力事業国営化の流れを受けて第一線を退くと、埼玉に構えた別荘「柳瀬山荘」に住み、還暦の頃から茶の湯の世界に足を踏み入れます。そして精力的に茶道具の名品を蒐集し、戦中にあっても茶の湯三昧の日々を送りました。

終戦を迎えると、温暖な地を求めて神奈川の小田原に構えた別荘「老樺荘」に夫婦で転居し、ここを終の棲家としました。昭和21年（1946）12月、満71歳の時でした。それまでに蒐集した茶道具の大半を柳瀬山荘の土地建物とともに国に寄贈しますが、茶の湯中心の生活は変わりませんでした。16年に及んだ隠居生活を終え、政府より電気事業再編成の主導役に抜擢されたのが昭和24年（1949）。自分が戦前より構想していた電力事業民営化の実現へと導き、結果、戦後の高度経済成長を支える大きな功績を残しました。多くの反対勢力に敢然と立ち向かい豪腕を振るうその姿を、人はいつしか「電力の鬼」と呼びました。そうした激務の間隙をぬって茶事を開き、また他家の茶事に顔を出し、名品蒐集の対象は茶道具以外にも及び、屈指の日本・東洋美術コレクション（松永コレクション）を築き上げました。コレクションは松永の没後、財団法人松永記念館より337件（371点）が福岡市美術館に寄贈され、専用の展示室「松永記念館室」にて定期的にテーマを変えて展示替えしながら常時約20件を公開しています。

老樺荘時代の松永の茶事の様子は、自著『わが茶日夕』所収の「小田原春秋記」と、最も親しい茶友の一人であった仰木政斎の『雲中庵茶会記』の中に垣間見ることができます。

本展は、これらの記録の内容から、当館収蔵の松永コレクションに同定される作品を出来るだけ抽出し、数例の茶事や個別のエピソードを取り上げて、その様子を垣間見るもので、「最後の大茶人」とも謳われる松永の茶の臨場感を、少しでも身近に感じていただける機会となれば幸いです。

〔学芸員 後藤 恒〕



福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051（代表） FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

おうばいあん 黄梅庵の庵会一消夏のもてなし

昭和24年(1949)7月16日(土)

出典: 松永安左工門『わが茶日夕』(河原書店、1950年)所収「小田原春秋記」p.400、仰木政斎『雲中庵茶会記』(味岡敏雄編集発行、1997年、非売品)下巻(pp.137-139)

[招客] 斎藤寿福庵(美術商)、山田瓢庵(美術商)、田山方南(文化財調査官)、藤沢寂仙(茶匠)、仰木政斎(工芸家)
◆寄付: 床 四代綱吉筆時鳥に飛燕の横物 ◆小間: 床 徹書記の消息/風炉 宗四郎 金 枯木に猿地文筒 【懐石】向 胡瓜に海老の酢あえ 器は唐津割山椒(1) /汁 地みそネギ/椀 小海老に椎茸青豆/焼物 蒲焼/進魚 雲丹/八寸 鮎薰製 青梅に豆ラッキー(ママ)/香物 胡瓜に味そ漬/お湯/お菓子 蒸物 <後座>【濃茶】床 簪組鈴翁旧藏花入(2) 花 摂子桔梗/水指 柿の蒂とも云ふべき平/茶入 利休所持 引家形内朱宗旦直書 利休口庵 旦とあり之又鈴翁遺愛品/茶杓 千ノ少庵作(3) /茶碗 青井戸(4) ◆広間: 唐金風炉に四方金雲鑄付/水指 南蛮/茶碗 斗々屋 替唐津の平/茶入 唐物中次/杓 象牙/広間床 伝宗達蓮花の幅(5)

黄梅庵は、老樺荘への転居後に松永が初めて設けた茶庵です。三畳下座床の茶室に八畳の広間などを備えたこの建物は、もと堺の商人・今井宗久(1520-1593)の所領として奈良にあったものを松永が入手して、昭和23年(1948)6月に老樺荘の主屋の北側に移築完成したもの(松永の没後は堺市博物館の敷地内に移築され現在に至ります)。

この日、気安い茶友連を招き、11時の来荘を待ちながら簫を手に庭を淨めていた松永は、汗だくで到着した仰木に「ヤーよくお越し。この暑さ、お出掛もドーカと懸念しました」とお出迎え。田山方南を正客として黄梅庵へ。三畳小間の床には室町時代の臨済宗の僧・徹書記の七月十六日付の消息が掛かり、松永がこの日に茶事を催した理由が明らかとなりました。懐石の向付は、当時は唐津と見なされていた上野割山椒形向付(1)に胡瓜・海老の酢あえを盛りました。土用を前に、焼物には小田原名物の鰻蒲焼のご馳走が。後座の床にはキヨウナデシコが活けられた白錦籠花入(2)。鈴翁旧藏のこの籠花入は、松永にとって夏季の茶事には欠かせない一品でした。青井戸茶碗銘「瀬尾」(4)にて得意の濃茶を振る舞うと、広間へ移動。その床には伝・俵屋宗達の蓮池図(5)という如何にも季節に相応しい一幅が掛かり、仰木は「すがすがと消夏の気張り良いお馳走であった」と賛辞を送っています。

この茶事の後、ほどなくして松永は政府より電気事業再編成の主導役に抜擢され、約16年に及んだ隠居生活を終え、「電力の鬼」と称されるほどの大車輪の活躍を見せることになるのです。

1 上野割山椒形向付 6客

陶器 径11.0cm(各)
桃山時代 16-17世紀

2 白錦籠花入

竹・藤製 高18.5cm
桃山時代 16-17世紀

3 茶杓 共筒

千少庵(1546-1614)作
竹製 長18.0cm
桃山時代 17世紀

4 青井戸茶碗 銘「瀬尾」

陶器 口径13.6cm
朝鮮王朝時代 15-16世紀

5 蓼池図

伝・俵屋宗達(生没年不詳)画
紙本墨画・掛幅装 105.9×40.8cm
江戸時代 17世紀

しょう かげん 松下軒の茶事—古唐津「老鶴」を用いて

昭和29年(1954)2月14日(日)

出典: 仰木政斎『雲中庵茶会記』下巻(pp.377-380)

[招客] 塩原禾日庵(実業家)夫妻、服部山楓(実業家)夫人、田中親美(古筆研究家)、服部梅素(美術商)、藤沢寂仙(茶匠)、平松常蔵(美術商)、仰木政斎(工芸家)
◆床 一株松口の方印ある条幅/書院 香合空中作御田笠(13) 松木地切子型炭取皆具 鈴翁好 南蛮内渋の灰器 【懐石】膳は松の木溜塗り/向 志野小振の筒 鰯の昆布〆 生のり/汁 合味噌小蕪/椀 白魚入鶏肉よせ 生椎茸 小松菜/焼物 鰯の塩焼 器織部四方透し鉢(6) /進魚 猫のわた 沙魚子糟漬を斑唐津へ/強魚 二段重にアイ鶏に茄子 白魚/湯吸物 落の塔に土筆/八寸 百合根に薰製/香の物 沢庵角切奈良漬鉢は唐津の沓鉢/酒器 粉引(7) 古備前徳利(8) 杯 阿蘭陀 唐津 以上包丁は小清/菓子 腰雪に越後屋製そば饅頭 <後座>【濃茶】床 光琳迹書光悦の誰云春風到来花始開云々/七官青磁口耳花入に椿にヤシの実を添え/水指 古備矢筈共蓋(9) /茶入 伊賀の水滴/茶碗 古唐津銘老鶴(10) /一葉と銘ある宗旦作と云われる茶杓 【薄茶】水指 古材釣鉢(政斎寄贈) /茶入は根来菴器(11) /茶杓 利休牙匙/茶碗 宗全作黒半筒 替赤樂

老樺荘の主屋は、柳瀬山荘の主屋「黄林閣」と比べては小さく簡素な造りで、松永はここに独自の趣向をこらした室を増築してゆきます。松下軒(または「松下亭」)は、主屋の西南隅に増設された四畳半台目の茶室です。黄梅庵の移築完成から5年以上を経た昭和28年(1953)12月に席開きされました。

それから幾ばくも経たないこの日、三共株式会社(現:第一三共株式会社)の創業者・塩原禾日庵(本名は又策)らを招いての茶事。着流し姿で出座した松

永は、あいにくの雨天に遺憾を述べる等の挨拶の後、懐石へ。鰯の塩焼きを盛った織部角切透鉢(6)は、柳瀬山荘時代に親交を深めていた北大路魯山人の助言で手に入れたもので、絶交後も手放すことなく愛用した器です。

さて濃茶に用いた茶碗、古唐津茶碗銘「老鶴」(10)は、奈良の数寄者・河瀬無窮亭(本名は虎三郎)が所持していたのを懇望し、自身所持の「安見子」という名の柿蒂茶碗と交換する形で昭和24年(1949)に入手したもの。見込みに鉄釉で「の」の字を描くように引かれた一筆模様が、まるで首を垂れた鶴に見えることからこの銘が付けられたのでしょう。松永は、年明けの茶事には定番のように用いました。この茶事で拝見した仰木は「耳翁八十才賀の祝としてこの上なき物」と、数えで80歳を迎えた松永への祝意を込めて評しました。

6 織部角切透鉢

陶器 口径22.7cm
桃山時代 16-17世紀

7 粉吹徳利

陶器 高15.9cm
朝鮮王朝時代 15-16世紀

8 備前鶴首徳利

陶器 高21.1cm
桃山時代 16世紀

9 備前矢筈口水指 共蓋

陶器 高17.7cm
桃山時代 16世紀

10 古唐津茶碗 銘「老鶴」

陶器 口径14.4cm
桃山時代 16-17世紀

11 根来菴器

木胎漆塗 高8.5cm
南北朝時代 14世紀

雨の中、桜を愛でながら

昭和31年(1956)4月8日(日)

出典: 仰木政斎『雲中庵茶会記』下巻(pp.565-568)

[招客] 野村香庵(実業家)、蓑半農軒(美術商)、栗山添光(料亭主人)、仰木政斎(工芸家)
◆床 無準の墨蹟十行程の名蹟(12) /金 天猫糸屋釜/時代詩絵の炉縁/書院 空中作御田笠という名香合(13) がただ一つ袱紗上に備へられている。【懐石】膳は喜三郎作皆具/向 唐津の割山椒

(1) に赤貝、嫁菜の膾もの/汁 合せ味噌/椀 海老真ジョー/焼物 興津鯛テリ焼を志野の銅羅鉢名器(14)に盛れ/進魚 北海産黒イカ/強魚 ムツの子にふき 胡摩湯波を赤鉢に/湯吸物梅肉/八寸 空豆桜ハエ/香の物スグキ 胡摩マフシ奈良漬に/酒器 青磁獅子フタ銚子の外/徳利 古備前(8) /杯 無地刷毛安南、和蘭陀、織部六角などの配合 <後座>【濃茶】床 向掛に元舟羽子より譲受られたと云ふ銘園城寺とある寂竹尺八花入に花岩根椿にムべの花/書院 古窯黄瀬戸の狛犬一基/水指 古備前矢筈共蓋(9) /角倉緞子袋に納られし茶入(中興名物浅野肩衝)/茶碗 唐津の老鶴(10) /茶杓津田宗及作共筒【薄茶】水指 同前/茶入 時代黒大金輪寺/茶杓 益田克徳翁作銘岩戸(15) /茶碗 宗旦箱長次郎作黒筒(16) 替ベルシャー

老樺荘の春、仏陀釈尊の降誕日とされるこの日、電気化学工業株式会社(現:デンカ株式会社)社長等を務めた野村香庵(本名は与曾市)らを招いて松下軒での茶事。降りしきる雨の中、老樺荘へと登る緑樹林に点在する満開の老桜が一入の雨情を添えたと仰木は記述しています。

南宋の禪僧・無準師範の墨蹟(12)が掛けられた床のはす向いに位置する書院には、本阿弥光甫(空中)作のおんた笠香合(13)。これは蓋表の中央に早乙女(田植えに従事する女性)が被る田笠を象ることで「おんた笠香合」と呼ばれ、春から初夏にかけての時節に用いる松永自慢の一品でした。懐石の向付は上野割山椒向付(1)に赤貝とヨメナの膾を、焼物は志野桐絵鉢(14)に興津鯛の照り焼きを盛りました。後座の床には「園城寺」と銘のある竹花入、はす向いの書院には黄瀬戸の狛犬(現在、愛知県陶磁美術館所蔵)、水指には戦前からの愛蔵品たる備前矢筈口水指(9)、茶入は中興名物の古瀬戸茶入「浅野肩衝」、そして茶碗は古唐津茶碗銘「老鶴」(10)の登場にて、濃茶。松永は薄茶を省略するのが常ですが、今回は美術商・水戸幸主人の代点により長次郎の名碗・黒楽茶碗銘「次郎坊」(16)などを用いて振舞われました。

12 法語 覚聰居士宛

無準師範(1177-1249)筆
紙本墨書・掛幅装 31.1×45.2cm
南宋時代・淳祐7年(1247)

13 おんた笠香合

本阿弥光甫(1601-1682)作

陶器 径11.2cm
江戸時代 17世紀

14 志野桐絵鉢

陶器 径27.1cm
桃山時代 16-17世紀